様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７３０７３１

研究課題名（和文）国語科教科書に内在する言語観に基づいた言語研究のための基盤的研究

研究課題名（英文）Basic research for the language studies based on language view in the Japanese textbooks

研究代表者
岩男　考哲（IWAO, Takanori）

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：３０５７８２７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題は，国語科教育の世界では「言語」というものをどのように捉えているのかという疑問について考えることであった．とは言え，この問題はとても大きな問題であるため，その解決につながるための，より具体的な問題を考える必要があった．そのために本研究期間で考えたのは「国語の教科書は，子どもの言語をどう描いているか」という問題であった．具体的には，比喩表現に注目し，その比喩表現の性質が学年が上がる毎にどのように変化しているかを考察した．その結果，小学校４年生を境に，比喩表現は抽象的なものが増えていくことが明らかになった．

研究成果の概要（英文）：This study was to clarify the language view of the Japanese class. However, since this problem is very big problem, it is necessary to consider the specific problems. So, in this study, we examined the appearance of the acquisition of the children of the words that have been drawn in Japanese textbooks. Specifically, we have focused on the metaphor. And, we discussed whether the nature of the metaphor is how changes in each grade.As a result, it found that the abstract metaphor increases from fourth grade elementary school.

研究分野：日本語学，国語科教育

キーワード：国語科教育　比喩表現　直喩表現　具体的語彙　抽象的語彙

１．研究開始当初の背景

本研究は，国語科教育に内在する言語観の一端を明らかにしたいという問題意識の下に開始したものである．

従来，言語研究の立場で行われた研究結果において様々な提言はなされてきているが，そこには（国語教育の立場から見た時に）１つ重要な観点が欠けていたように思える．それは，国語教育の世界ではどういった言語観が浸透しているのかという観点である．

たとえ高度な言語研究が行われようとも，それが国語教育における言語観と合致しない言語観の下で行われた研究であるならば，少なくとも「国語教育と言語研究との連携」という観点では失敗に終わっていることになるだろう（仮に，「言葉の研究において意味は不問にすべきだ」という考えの下に行われた研究が存在したとして，それが非常に優れた分析であったとしても，おそらく，現在の日本国内における国語教育に直接貢献するのは難しいものと考えられる）．よって，国語科内でどういった言語観が共有されているのか，そして，それに基づくと，どういった言語研究が必要とされることになるのか，といった視点は欠かせないと考えられるのである（これは，文法研究が国語科に導入された当初と現在とでは文法研究に求める内容が変化しているためだと言っても良いだろう）．

２．研究の目的

「１．研究開始当初の背景」で述べたように，本研究の目的は国語科内に受け入れられている言語観を探るものであった．しかし当然ながら，「国語科の言語観」なるものが国語科のテキスト内のどこかに懇切丁寧に明記されているわけではない．よってまずは，国語科の言語観を考察するための足掛かりが必要になる．そこで本研究では，国語科内部では言語というものをどういうものとして捉えているのかを知ることを第一の目的とした．言語観なるものを直接知ることは非常に困難ではあるが，テキスト内で言語に関する説明や扱いがどのように述べられているかを知ることは可能である．そのことを知れば，国語科内で言語がどう扱われているかを考察することができる（少なくとも，いきなり言語観を探るよりは考察しやすくなる）．延いては，そこから国語科内の言語観を垣間見ることも可能だと考えるのである．

３．研究の方法

研究の方法としては，教科書全出版社（東京書籍・学校図書・三省堂・教育出版・光村図書）の国語の教科書を調査対象とし，そこに現れる直喩表現を収集した後に，その直喩表現の性質を考察することにした．

比喩表現（その中でも特に直喩表現）に着目した理由を以下に述べる．

まず第一に，国語科の『学習指導要領』の中に，「言葉には，考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと(『小学校学習指導要領』)」という国語科における言語観の一端を述べるかのような文言が存在することによる（ただし，これだけでは単に「人の思考と言語の間には何らかのつながりが存在する」といったことを述べただけであり，具体性に欠ける）．

このことから，少なくとも，言語と人間の認知能力とのつながりという観点に基づいたアプローチが（本研究の目的を達成するためには）有効であることが分かる．

それを受けて第二に，比喩表現と人間の認知能力とのつながりとが指摘されて久しいことによる（Lakoff & Johnson 1980）．国語科が言語と人間の認知能力との間に何らかのつながりを想定しているのであれば，そのつながりをより具体的に探ることが本研究の目的を達成する効率的な手段だと考えられるのである．

また，その中でも特に直喩表現に着目した理由は，隠喩表現の判断の困難さにある．例えば，「机の脚」は現代でもなお，隠喩表現と呼べるであろうか？あるいは，「日差しが降り注ぐ」はどうであろうか？このように，隠喩表現は，それが今もなお比喩表現であるのか，それとも「死んだ比喩（既に，当該の語の「辞書的な意味」になってしまっているのか）」であるのかの判断に迷うことが少なくない．そのため，今回の調査対象は直喩（明喩）表現に限定することにした．このことにより，調査者によって比喩として扱うか否かの判断が揺れることも少なくなると考えられる．

以上の理由により，本研究では義務教育課程，つまり小学校１年生～中学校３年生における全出版社の国語教科書に用いられる直喩表現を収集し，そこに見られる特徴を考察することにした．

次に，どういった観点から直喩表現を分析したかを述べる．本研究では，瀬戸編(2007)で提示された「形態類似」「特性類似」「機能類似」という観点から，国語教科書に現れる直喩表現を分類した．まずは，それぞれの類似の簡単な解説を行う．

形態類似とは形の類似性に基づいた比喩のことで，例えば「（人間や動物の）首」と形の似た，瓶等のすぼまった部分のことを「（瓶の）首」と呼ぶような比喩を指す．

次に特性類似とは異なるカテゴリ間に共通する特性が見いだされる比喩を指す．具体的には「（入れ物が）空である」という特性と「（人生が）空である」という状態の間には＜中身が存在しない＞とでも言うべき共通した特性が見いだされている．これが特性類似の例である．

最後に機能類似とは働きや作用の類似に基づいた比喩である．「敵を攻撃する」と「考えを攻撃する」では，物理的か否かという点では異なりを見せるが，対象にダメージを与

えるという類似点は見いだせよう．

以上が本稿が基づく概念の紹介である．なお，瀬戸編(2007)では特性類似と機能類似の区別が困難な場合があることが認められているが，今回の調査では形態類似なのか機能類似なのかを迷う例も存在した．そうした場合は，本稿では両者を備えているものとして扱った．

以上，本研究が何を調査対象としたか，そしてその調査対象をどういった観点から分析したかを述べた．次の４．ではその分析の結果を述べる．

４．研究成果

以下に収集したデータを瀬戸編(2007)の観点から分析した結果を挙げる．

	1	2	3	4	5	6	中1	2	3
形	0	7	0	3	4	3	5	8	8
機	0	1	0	1	0	2	1	0	3
特	0	0	0	1	2	3	5	6	6

表１：光村図書の調査結果

	1	2	3	4	5	6	中1	2	3
形	2	9	12	1	4	6	4	9	11
機	0	2	2	1	2	3	0	1	5
特	0	0	1	1	2	4	5	5	3

表２：東京書籍の調査結果

	1	2	3	4	5	6	中1	2	3
形	1	0	1	4	2	7	4	11	9
機	0	0	0	0	0	0	2	2	0
特	0	4	4	4	2	5	5	4	9

表３：三省堂の調査結果

	1	2	3	4	5	6	中1	2	3
形	0	4	1	3	3	4	10	9	13
機	0	1	0	1	1	0	0	3	2
特	1	3	1	2	2	3	5	6	15

表４：教育出版の調査結果

	1	2	3	4	5	6	中1	2	3
形	0	7	4	9	5	6	6	9	14
機	0	1	0	1	1	0	0	2	1
特	0	1	1	4	1	6	12	10	21

表５：学校図書の調査結果

次に，以上の調査結果を全てまとめた表を挙げる．

	1	2	3	4	5	6	中1	2	3
形	2	27	18	20	18	26	29	47	56
機	0	5	2	4	4	5	4	11	12
特	1	8	7	12	9	19	31	28	54

表６：全出版社の調査結果

以上が，本研究において行った調査とその分析結果のまとめである．次に，以上の調査から明らかになったことを以下にまとめる．

まず，「形態類似」が他の２つの類似に比べると，低学年から登場する量が圧倒的に多いことが分かる．それに対して，「機能類似」「特性類似」が一定数現れるのは，ある程度学年が上がってからである（付言ながら，表３から，三省堂だけが他の出版社に比べ，低学年から「特性類似」が相対的に多く現れていることが分かる）．

そこで，「形態類似」と「機能類似」「特性類似」との間の違いは何かを考えたい．すると，「形態類似」が五感で捉えられる具体的な類似性であるのに対して，「機能類似」「特性類似」とは極めて抽象的な類似性であることが分かる．このことから，少なくとも比喩表現に注目する限りでは，国語科内では言葉というものを，学年の低いうちは（五感で捉えられるような）具体的な事物を表すものとして捉えさせようとしており，それが学年が上がるにつれ抽象的な事物を表すものへとその認識を徐々に切り替えさせようとしていると推察できる．

そして，表６から考えるに，その「具体から抽象へ」の境界線は小学校４年生の付近に存在すると言うことができるのである．

以上，ここでは本研究の調査と分析結果の概要について報告した．

＜引用文献＞

瀬戸賢一編(2007)『英語多義ネットワーク辞典』小学館.

Lakoff, G. and M. Johnson.1980 *Metaphors We Live by*. Chicago Press.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①<u>岩男考哲</u>,「複合辞「というと」の接続表現的用法について」,『日本語文法』, くろしお出版, 16 巻 1 号, 査読有, 2016, pp.71-79

②<u>岩男考哲</u>,「引用形式が名詞句をつなぐ表現について―「という」「といった」「とかいう」について」,『信州大学教育学部研究論集』, 第 9 号, 査読有, 2016, pp.1-8

③<u>岩男考哲</u>,「国語教科書に現れる直喩表現に関する調査報告」,『信大国語教育』, 信州大学, 第 25 号, 査読無, 2015, pp.54-57

④岩男考哲,「国語教科書における「表現の工夫」に関する覚書－直喩表現を対象に－」,『信大国語教育』,信州大学,第 24 号,査読無,2014,pp.63-69

⑤岩男考哲,「「ときたら」構文の意味と主題－提題文の体系化に向けて－」,『日本語文法』,くろしお出版,14 巻 2 号,査読有,2014,pp.101-117

⑥岩男考哲,「「ときたら」構文と「といったら」構文の評価的意味」,『信州大学教育学部研究論集』,信州大学,第 6 号,査読有,2013,pp.63-74

⑦岩男考哲,「「と言う」条件形を用いた文の広がり」,『日本語文法』,くろしお出版,12 巻 2 号,査読有,2012,pp.179-195

⑧岩男考哲,「構文環境における新たな意味的連関の発生―「言う」と「来る」を中心に―」『信州大学教育学部研究論集』,信州大学,第 5 号,査読有,2012,pp.43-53

〔学会発表〕(計８件)
①岩男考哲,「日本の「国語教科書」で用いられる直喩表現の推移について」,2015 年台大日本語文創新国際学術研討会,台湾大学(台湾),2015.10.25.

②岩男考哲,「引用形式由来の提題形式が提示する名詞句について」,研究会『洛中ことば倶楽部』,同志社大学(今出川),2015.7.4.

③岩男考哲,「日本語学の視点で国語教育を眺める」,中学校教育研究会,信州大学附属長野中学校,2015.5.16.

④岩男考哲,「「と言う」の条件形の使用の全貌」,研究会「TLM」,西宮市市民交流センター, 2015.2.8.

⑤岩男考哲,「メタ用法の叙述の類型での位置付け」,日本言語学会 149 回大会,愛媛大学,ワークショップ『名詞述語研究への新たな話題提示(代表:岩男考哲)』,2014.11.16.

⑥岩男考哲,2014 年度日本教育大学協会北陸地区会国語科・書道科合同研究協議会,信州大学,「国語教科書に表れる直喩表現について」,2014.10.16.

⑦岩男考哲,「引用形式が名詞をつなぐ表現の研究―「という」「といった」と「とか」をめぐって」,日本語文法学会第 14 回大会,早稲田大学,パネルセッション『名詞句間の関係に着目した名詞研究の可能性(代表:建石始)』,2013.12.1.

⑧岩男考哲,「「言う」の条件形を用いた文の広がり」,『第２回引用話法の会』,大学共同利用施設 UNITY(兵庫県),2012.3.18.

６．研究組織
(1)研究代表者
岩男　考哲(IWAO,Takanori)
信州大学・学術研究院教育学系・准教授
研究者番号:30578274